



どんぐり

内 容

No.85

兵庫県立南但馬自然学校 開校30周年記念講演会特集

- 開会のことば・主催者挨拶・来賓挨拶
- 記念講演・体験「五感を使って自然にふれる体験活動」
- 記念講演・体験「たき火をとおして学ぶ」
- 南但馬自然学校の植物にふれる野外観察
- 実践発表



記念講演・体験「たき火をとおして学ぶ」

(令和6年度 市川町立川辺・瀬加・甘地・鶴居小学校連合、神河町立神崎・寺前・長谷小学校連合)

兵庫県立
南但馬自然学校

HYOGO KENRITSU MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKO

Nature Education Center

開会のことば

兵庫県立南但馬自然学校長

西岡 智也



本校は、1994年4月1日に開校し、今年度で30周年を迎えました。開校当初から利用された方々の中には、親子2代にわたり本校を利用された方もいらっしゃるでしょう。自然学校の中核施設として、多くの学校を受け入れ、数多くの子どもたちが自然の中でさまざまな体験をしてきました。これまで、教育活動を支えてくださった皆様に心より感謝申し上げます。

本校は、自然学校の充実と質の向上を目指し、調査・研究、指導者養成研修、機関誌などによる情報提供を行ってきました。特に、自然にふれる体験活動を重視し、五感を使って自然を知る活動を行い、子どもたちに貴重な経験を提供してきました。

本校の敷地には朝来山の広大な山林が広がり、希少な絶滅危惧種を含めた多様な動植物が生息しています。特に、朝来市の天然記念物である雨乃宮の池生態系は本校の豊かな自然を象徴するものです。これらの自然を観察することは本校が誇る大切な自然体験活動です。

今後も、自然学校の目的と方向性をしっかりと見極め、本県の取組を牽引するとともに、本校の特色を生かした自然体験活動の充実を図っていくことを重要なミッションとして捉え、次の40周年に向けてさらなる前進を目指します。今後とも、皆様のご支援とご協力を賜りながら、自然学校の活動を一層発展させてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

主催者挨拶

兵庫県教育長

藤原 俊平



南但馬自然学校の開校30周年を祝う記念講演会にお招きいただき、大変光栄に思います。この30年間、自然学校の運営に携わってこられた教職員の皆様、また、地元の朝来市をはじめとする各市町の教育委員会の皆様、推進に尽力してくださった各学校の先生、地域の皆様に深く感謝申し上げます。

私は但馬出身で、養父小学校を卒業しました。50年前のことですが、当時は今のような自然学校の行事はありませんでした。しかし、5年生の時に1泊2日のキャンプで、仲間たちと共にテントを張り、カレーを作って食べ、夜はキャンプファイヤーをしたことを今でも鮮明に覚えています。大変楽しい2日間でしたが、2日目にはもう帰らないといけなのかと寂しく感じたことも記憶に残っています。

南但馬自然学校は、昭和63年にその構想が始まり、翌年事業化されました。その背景には、県の「こころ豊かな人づくり」運動があり、全国でも例を見ない長期宿泊型の体験学習が実現しました。平成6年には、南但馬自然学校が開校し、これまでに約2,000校、約75万人の子どもたちが体験を重ねてきました。また、一般利用も含め、延べ119万人以上の方々がこの学校を利用しました。

昨年、自然学校に参加した5年生に対して行ったアンケートでは、約94%の子どもたちが「自分の力で解決できることが増えた」と回答し、約97%が「友達との協力の大切さ」を感じたと答えました。この結果から、自然学校が子どもたちの主体性を育み、人と人との絆を深める重要な場であることが改めて実感されます。県においても、自然学校の更なる魅力向上に努め、学校、家庭、地域、社会全体で子どもたちの「生きる力」を育成してまいります。最後に、今後も南但馬自然学校の運営に対するご支援を賜りますようお願い申し上げます。

来賓挨拶

但馬県民局長

多田 欣也



「自然とのふれあいの中で、自然の神秘や優しさに感動し、ときにはその恐ろしさにも触れることで、豊かな感性や粘り強さを育み、また、人とのふれあいを通して思いやりや協調性を身に付ける」という基本理念を実現するために、豊かな自然環境の中で、様々な体験活動を通じて児童の人間性や問題解決能力を育む場として、長年にわたりその取組を続けてこられました南但馬自然学校に、深く敬意を表します。

近年、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化しています。その影響で、子どもたちが地域で活動する機会が減少し、社会性や直接体験が不足しているという課題が浮き彫りになっています。これらの課題に対処するためには、学校や日常生活では体験できないような学びを通して、子どもたちの「みずみずしい感性」や「豊かな人間性」を育むことが重要です。

南但馬自然学校は、朝来山登山などの「自然とのふれあい体験」や、隠れ家づくりなどの「人とのふれあい体験」、観光マップづくりなどの「地域とのふれあい体験」を提供し、子どもたちに感動的な体験を通じて学びの場を提供しています。また、「天空の城」として有名な竹田城跡を望む場所に見晴台・展望枠を設置するなど、地域資源を活用した新たな事業にも取り組み、自主・自立の精神や連帯感の育成に努めておられます。

開校30周年を迎えられたことを祝し、今後も他府県の模範として、さらなる充実を図るとともに、新しい時代に対応した兵庫県の教育創造を牽引していくことを期待しております。

来賓挨拶

朝来市教育長

小倉畑 祐貴



本日は兵庫県立南但馬自然学校開校30周年記念講演会に多くのご参会を得て開催されますこと誠にありがとうございます。地元を代表し、お祝いを申し上げます。

これまで30年間、多くの利用者の方々にお越しいただいた南但馬自然学校ですが、現在は市内9つの小学校のうち8校がお世話になっております。

また、地元区をはじめ市民との交流や利用があり、30数年前、兵庫県と地元旧山東町がともに目的を共有して設置に至った経緯や関わりを含め、南但馬自然学校が今日まで多くの努力と工夫を重ねて30年の歴史を刻んでこられたことに、敬意を表しますとともに改めて感謝を申し上げます。

この地域は、ご存じの方も多いかもかもしれませんが、弥生時代中期から古墳時代に集落群があったとされる遺跡や、約1500年前に但馬地域を広く治めた人物の墳墓である茶すり山古墳をはじめ、古い歴史を語る多くの遺産があります。加えて、国の特別天然記念物であるオオサンショウウオが多く棲むことに裏打ちされた、生き物にやさしい、そして豊かな自然環境を持つ地域でもあります。この地域で、そして南但馬自然学校で、将来を担う子どもたちの成長の1ページを過ごしていただくことは、子どもたちをはじめ利用者の方々の方々の様々なニーズに応える多くの可能性を秘めていると確信をしております。

どうか今後も南但馬自然学校を、そして朝来市を訪れて、この地域の自然に、歴史遺産に、そして人に触れていただくことをお願いいたします。

記念講演・体験「五感を使って自然にふれる体験活動」

兵庫県立大学名誉教授 服部 保

なぜ、五感を使って自然を観ることが大事なのでしょう。

我々人間は、生物です。生物というのは、五感を使って生きています。だから、我々も自然を感じるためには五感を通じて自然に接する力を身につける必要がありますが、その機会が少ないため、なかなか身につけません。

今回は、午前中の野外観察で五感を通じて自然を観てきたことのおさらいをします。

その前に、皆さんの住んでいる地域(兵庫県南部)と南但馬の地域の違いは何か分かりますか。

信号機を見ると、皆さんの地域では横向きに設置されていますが、乗ってきたバスの車窓から見えるこのあたりの地域の信号機は、縦向きです。

降雪地域では、雪の重さに耐えなければならないため、雪の積もる面積が少なくなるように信号機は縦向きに設置されています。他には、屋根を観ると、瓦に輪のようなものがついています。これは、溶けた雪が一挙に落ちてこないよう、ストッパーの役割をしています。

このように、自然環境に合わせてものは造られているため、それらを観察することで地域の違いが分かります。

自然環境は、生き物の生活にも違いを生んでおり、例えば、野ウサギの毛は、降雪地域では冬に白くなります。保護色として外敵から身を守るためです。

また、ツバキは本来寒さに弱いのですが、日本海側に分布するユキツバキは、雪の中に潜り込んで冬を越します。雪の中の方が外よりも温かいためです。

この南但馬自然学校には、タジマタムラソウなどの面白い動植物がたくさんいますので、このような視点で周りの自然を観てください。

それでは、五感を使って自然を観たことのおさらいをしていきます。



【味覚:ヤナギタデ(タデ)】

タデは、食べると辛いと感じます。日本では昔から調味料として使用していた植物です。

現在では、「辛い」というと唐辛子の辛さを想像しますが、本来日本人が辛いと感じていたのはこの「タデ」です。

この「タデ」の辛さを日本人は楽しんでいました。

唐辛子が日本に入ってきたのはずっと後のことです。今でもこの「タデ」は、お刺身の横に赤い双葉として添えられています。これが味覚です。



ヒイラギ



ヤナギタデ

【触覚:ヒイラギとヤブムラサキ】

ヒイラギは、トゲがあり危険ですが、表面はつるつるしています。一方ヤブムラサキは、葉の表面に凄く細かい毛がたくさん生えているため、滑らかな手触りが良いです。さわり心地はピロードやペロア、ベルベットに例えられます。これが触覚です。

【嗅覚:シキミ】

ヒイラギと同じように表面はつるつるしています。葉を折ったりもんだりして香りを嗅いでみると良い香りがします。これが嗅覚です。

ただし、これは有毒ですので口に入れてはいけません。

シキミという植物は、触ってもかぶれることはありませんし、病気になることはありませんが、食べると中毒になり、命を落とすことがあるので危険です。

タデのように辛いですが調味料になる植物もあれば、シキミのように有毒な植物もありますので、しっかりと覚えておかないといけません。



シキミ



ヤマナラシの葉 (左)
ミツマタの葉 (右)

【聴覚:ヤマナラシ】

葉身と枝を繋ぐ葉柄が長いヤマナラシ。他の植物は2cmほどしかありませんが、ヤマナラシの葉柄は6～7cmあります。

葉柄が長いことで、他の植物は全然揺れないほどのわずかな風でも揺れ、葉どうしがぶつかって音が鳴ります。だからヤマナラシといえます。

聴覚を使って観る数少ない植物がヤマナラシです。

最後に紹介する植物はミツマタです。枝が分かれる所がどこも3つに分かれているためミツマタといえます。

南但馬自然学校では、ミツマタを校内に植えています。

目的は2つあり、1つ目は土壌を守るためです。鹿が食べないため、ミツマタの根がきちんと土壌を守り崩れません。防災・減災のため敷地内に植えています。

2つ目の目的は、和紙づくりを体験してもらうためです。外皮の繊維が非常に強く、児童が2人で引っ張ってもちぎれることがありません。ノートやコピー用紙に使用している紙はパルプからつくりますが、和紙はコウゾ、ミツマタ、ガンピから作ります。その中でも、このミツマタは非常に繊維が強いためお札の原料となっています。

この繊維の強さも実際に引っ張ってみないと分かりません。

だから、体験することは凄く大事だと言うことが分かります。

目で見ると(視覚を使う)だけであれば、本やテレビなどで十分ですが、それだけでは十分に自然を感じることはできません。だからこそ、五感を使うことが大事なのです。これからも、五感を使って自然をじっくり観てください。



ミツマタの皮を引っ張る児童

～講演会を終えて～

今回は、200名近い児童分の植物の小枝や葉を用意しており、五感を使って観察するという体験型の講演会でした。しかし、午前の野外観察でメモを児童にとらせ、そのふり返りをもとに復習するとともに、観察中に十分解説できなかったことを講演で話すという構成で、五感を使って追加体験させてはどうかと後になって感じております。

今日の取組を自然体験学習の参考にしていただき、さらなる自然体験学習の推進をお願いします。

記念講演・体験「たき火をとおして学ぶ」

日本焚き火協会 会長 猪野 正哉

たき火とともに

「皆さんこんにちは。今日は、圧がすごいですね。」という軽快な挨拶から始まった講演会。登壇したのは、日本で唯一“たき火だけで生活をしている”という猪野氏。猪野氏は雑誌の執筆や監修、テレビなど多くのメディアに出演経験があり、そのユニークな肩書きと豊富な経験で注目を集めています。猪野氏はこれまで、たき火や石焼き芋をテーマにメディア出演を果たし、たき火監修も担当されています。テレビ番組「マツコの知らない世界」に出演経験があり、「私が大きいので、マツコさんは思っていたより小さかったんですよ。」というエピソードに、会場は和やかな笑いに包まれました。

まず、猪野氏は「火の用心」の大切さを説き、全員にその言葉が記されたステッカーを配布しました。「今日、この言葉だけは覚えて帰ってください。」という言葉に、火の安全性を確保しながら楽しむたき火への基本姿勢が伝わってきました。



マッチを使う体験

イベントの最初のアクティビティは、マッチを使った火起こし体験です。「最近ではマッチを擦ったことがない方も多いのではないのでしょうか。」という猪野氏の言葉通り、大人でも徐々にマッチに触れる人が多い様子。姫路市が日本のマッチ生産量の80%を占めるという話題を交えながら、「大人でも意外とマッチが擦れないことが多いです。」と語り、参加者一人ひとりがマッチを擦る体験を行いました。猪野氏は、「火起こしは難しそうに見えますが、やり方さえ覚えれば誰でも簡単にできます。」と説明。マッチの正しい使い方を丁寧に指導し、たき火に対するハードルを下げる取組が印象的でした。

薪割りで学ぶたき火のコツ

次に取り組んだのは、薪割り体験です。専用の道具『キンドリングクラッカー』を使い、薪を割り箸ほどに細かく割る作業を行いました。猪野氏は、「火起こしのコツは細い薪を初めに燃やすこと。燃焼効率が高まり、火が安定します。」とアドバイス。参加者は太い薪を割り箸サイズに加工し、たき火の準備を整えました。

ハンマーの使い方について「勢いよく振り抜くのではなく、振り落とす感覚で。」とか、「素手の方が滑りにくく安全です。」と安全面の配慮も忘れない猪野氏。各班をめぐり、具体的なアドバイスを伝え、参加者の安全を第一に考えながら指導していました。他にも、薪の選び方等について実演しながら、参加者の理解を深めていました。薪割りを終えた参加者たちは、自らの手で準備した薪をたき火台に入れ、さらに火を強めていました。



たき火を楽しむ

薪割りが終わると、いよいよたき火台で火を起こします。猪野氏は、「杉の葉や松ぼっくりを使うと簡単に火がつきます。」と説明し、参加者たちは次々に火を灯していきました。また、猪野氏はた

き火をする際のコツも丁寧に教えてくれました。「薪を組むときは立体的に組む」「燃焼効率を上げるためには細かい薪を使う」など、実践的なアドバイスが随所に盛り込まれています。さらに、たき火の炎の状態についても触れ、「熾火(おきび)が調理には最適です。」と解説。その場で学んだ知識は、今後のたき火やアウトドア活動で役立つことでしょう。



火が熾火になり安定すると、たき火の本番ともいえる『マシュマロ焼き』です。猪野氏は、「1個目はそのまま焼いて、2個目は醤油をスプレーして、みたらし団子風にして食べてみてください。」とアドバイス。まずはシンプルに焼いたマシュマロを味わい、その後、醤油を軽くスプレーして炙ることで、まるでみたらし団子のような味を楽しむというユニークなアレンジで楽しみました。子どもたちからは歓声上がり、大人も新しい味覚体験に驚きと喜びを見せていました。

子どもたちの感想

プログラムの終盤には、子どもたちから感想が寄せられました。

「初めてマッチを使って火を起こせて感動しました。」

「マシュマロに醤油をかけたなら、本当にみたらし団子の味になりました。」

「たき火が楽しくて、また挑戦したいです。」

たき火を通じて火の扱いに慣れるだけでなく、自然との関わりや新しい発見を楽しむ機会となりました。



たき火の未来をともに

猪野氏は最後に、「たき火は一見難しそうに見えますが、やり方を覚えれば誰でも楽しめます。ぜひ、ご家庭やアウトドアで挑戦してみてください。」と呼びかけました。

今回の講演会は、たき火の魅力を広めるだけでなく、火を通じた学びと楽しみを提供する貴重な場となりました。

たき火のコツにまつわる猪野氏語録 (たき火台で火を起こす場面で)

「多分、ここが一番皆さんの見せ場だと思うので、楽しんで。失敗してもそれもたき火の良さなんで。」

「失敗しても別に大丈夫、笑って、初めからまたやってください。」

「まずは、杉の葉っぱに火をつけて、松ぼっくりにも。どんどん、バトンを渡していく感じで。」

このような言葉から、猪野氏は親しみやすく、楽しさを共有しながらも参加者一人ひとりの経験を大切にされている様子が伝わりました。また、失敗を恐れずに挑戦することを促す姿勢が、たき火を通じて学びや喜びを深める原動力となっていると感じました。



南但馬自然学校の植物にふれる野外観察

兵庫県立南但馬自然学校開校30周年記念講演会当日の午前中には、本校の前学長で兵庫県立大学の服部保名誉教授を講師に迎え、市川町立川辺・瀬加・甘地・鶴居小学校連合と神河町立神崎・寺前・長谷小学校連合の5年生児童（135名）を対象とした野外観察を行いました。大屋根広場に集合した子どもたちは、服部名誉教授から五感を使って植物にふれる方法について話を聞いた後、野外観察に出かけました。

ヌルデの虫こぶ



ヌルデの虫こぶ

芝生広場の漆園では、日本の全てのウルシ類（6種類）を栽培しています。「ウルシはかぶれるから気をつけて」と注意を呼びかけますが、実際に目にしなければ、どれがウルシかわからないので、じっくり観察できるようにしています。この日はウルシの一種であるヌルデを観察しました。アブラムシの仲間が寄生し、大きな虫こぶができています。その虫こぶを割り、中の様子も観察しました。江戸時代に既婚女性が歯を黒く染めていた「お歯黒」に、虫こぶを乾燥させたものを使っていたという話を聞かせていただきました。

葉書の木

森のスポーツ広場ではタラヨウの葉に、先を削って尖らせた割り箸で文字を書きました。書いた部分が茶色に変色し、文字が浮かび上がる様子を観察しました。葉に文字を書いたことから「葉書」の語源になったと言われていません。実際に、タラヨウの葉に住所を書き、切手を貼ると、定形外郵便物として送ることができます。



郵便で届いたタラヨウの葉

ライターの火で葉をあぶると・・・

雨乃宮の池の下にはシロダモがあります。シロダモの葉の表面は緑色ですが、裏面は白っぽい色をしています。葉の表面をライターの火であぶると、裏面の白っぽい部分が緑色に変化しました。葉の裏面は蠟（ろう）に覆われていて、それが溶けることで、本来の葉の色が見えるようになるからです。また、タラヨウやソヨゴの葉をライターの火であぶると、火が当たった部分を中心に、黒い環ができました。葉の形や大きさは異なっていますが、どちらもモチノキ科の植物であるため、同じような性質をもっています。



ライターの火であぶった
タラヨウ(上)とソヨゴ(下)の葉



ライターの火であぶった
シロダモの葉

ミカンの香り

道端には、マツカゼソウが自生しています。本校では、多くの植物が鹿に食べられてしまいましたが、マツカゼソウは鹿が好まないため、校内ではよく目にします。子どもたちは、葉を取って手でよく揉み、それを鼻に近づけて匂いを嗅いで、「嗅いだことのある匂いだ」と口にしていました。ミカンの香りがするのです。樹木ではなく草として育つ植物です。草からミカンの香りがするのは何とも不思議な気がしますが、実はミカン科の植物なのです。



マツカゼソウ

絵の具のような実とビロード(ベロア)のような手ざわりの葉

どんぐり園の近くにあるヒサカキが黒い実をつけていました。この実を指で潰して紙にこすりつけると、まるで絵の具で画用紙に色を塗ったように、きれいな青い色がつきます。実の色からは想像できないような鮮やかな色だったので、子どもたちは驚きの声を上げていました。

また服部ガーデンでは、ヤブムラサキの葉に手でそっとふれました。ビロード(ベロア)のような柔らかな感触がします。葉の表面をよく観察してみると、細かい毛がびっしりと生えていることがわかります。この細かい毛により、ビロード(ベロア)のような柔らかい手触りになることを教えていただきました。

野外観察を終えて

野外観察を終えて、大屋根広場に戻ってきた子どもたちが手にしているレジ袋は、観察した植物でいっぱいになっていました。実物を目の前にして、服部名誉教授の説明を聞きながら、手でさわったり、匂いを嗅いだり、色の変化を見たりしました。このように五感を使って植物にふれることで、様々な驚きや発見がありました。その驚きや発見を持ち帰ろうと、観察した植物を次々とレジ袋に入れている子どもたちの姿が大変印象的でした。自然とのふれあいを通して、たくさんの不思議や感動が味わえる楽しい時間を過ごすことができました。



ヒサカキの実を紙にこすりつけると

服部名誉教授からのメッセージ



兵庫県立南但馬自然学校(以下、本校)は本年で30周年を迎えることができました。

本校では様々な体験学習を30年間進めてまいりました。中でも自然体験学習には集中的に取り組む、様々な成果をあげてきたところです。10月31日の30周年記念行事において、その中核となる自然体験学習の指導を担当させていただきました。記念行事の自然体験学習で得られた重要な成果や課題等を今後の学習に活用できるようにまとめてみました。

自然体験学習は、午前(90分)の「野外観察」と午後(60分)の「広場でのお話」の2つの内容で実施されました。「野外観察」は4班(1班40人程度)に分け、各班は講師1名と2~3名の指導補助員という編成としました。野外での観察指導には1班40人程度は少し多く、20人程度が限界のように思いました。観察時間については、本校のように自然が豊かで、観察すべき生物の多い所では120~150分にしても良いように感じました。

現地での指導は、私が説明する植物を子どもたちが採取し、五感を使って感じ取るというものですが、植物にふれることによって今まで知らなかった自然を意識できたように思いました。子どもたちにはレジ袋などを持たせて、採取した植物を持ち帰らせました。持ち帰らせたことで、一過性にならなかつたと思います。子どもたちは説明をよく聞いていたのですが、メモ帳を持参させて、メモするよう指導すれば良かったと反省しています。メモ帳は果実や花の色を写すこともできるので、これからは全員に持たせた方が良いでしょう。

開校30周年記念講演会実践発表

開校30周年記念講演会において、小野市立小野東小学校と赤穂市立城西小学校の2校から令和5年度に本校で実施された自然学校の実践発表がありました。

1. 合いMODE ~自分のためでなく、みんなのために！〇〇合いを増やそう！~ 「支え合い 挑戦し合い」

小野市立小野東小学校
(前小野市立中番小学校)
森田 幸大 教諭



※森田教諭には、前任校の小野市立中番小学校での実践を発表していただきました。

(1) テーマ設定

学年目標を「合いMODE ~自分のためでなく、みんなのために！〇〇合いを増やそう！~」と掲げ、1年間をスタートした。事前学習において、児童にテーマを考えさせた。自然学校に臨むにあたって自分たちに足りないことを考え、話し合ったところ「挑戦」という言葉が出てきた。児童の実態として、「自分がしなくても、誰かがしてくれる」という学年の課題があり、自然学校前に児童が自分たちからこの言葉を導き出した。さらに友だちや周りの人からの「ささえ」があれば安心して挑戦できそうだという意見が出てきた。学年目標の“〇〇合い”に当てはめ、『支え合い・挑戦し合い』と設定した。

(2) 事前学習

隠れ家づくりのためのロープワーク実習、火おこし体験を出前事業で実施。火おこしでは、火をつけることができず、「自然学校では、絶対つける！」と自然学校への意欲が高まった。

自然学校

(3) 自然学校での体験活動①

野外炊事

野外炊事の際に火おこしをした。

【挑戦し合い】

グループで、交代しながら、声を掛け合い、励まし合いながら行った。

【支え合い】

苦勞して火がついた時には、泣き出す児童もいた。

【感動体験】

(3) 自然学校での体験活動②

キャンドルナイト

自然学校中に挑戦したこと、支え合ったこと、成長したことを落ち着いた雰囲気の中で、時間をとって語り合った。

普段自分からあまり話さず、友だちとの関係も希薄な児童が、「班のみんなに支えられていろいろなことに挑戦できた」と発表した。

(4) 自然学校後の学校生活へ

実施後にふり返りをすると、自分が友だちの支えになっていたこと、自分や活動班の友だちが気付いていなかった挑戦を知る機会となった。

学校生活の中で、自分から行動し、仕事を見つけ、最後までやり遂げようとする児童が増えた。

2. 自然の中でGrowing up!! ～自然学校をぜったいに… 成功させようね!～

赤穂市立城西小学校
市下 優希 教諭
植山 智佳 教諭



(1) テーマ設定

自然学校のねらいやテーマを設定するにあたって、自然学校が児童・保護者・教師にとってどのような機会となればよいかそれぞれの立場からの願いを集めた。児童にはアンケート・学年のよいところ・レベルアップできるところ・自然学校でつきたい力などを考えさせた。保護者には、アンケートの実施や面談での聞き取りにより自然学校で身に付けてほしい力について意見を集約した。そこから出てきたキーワードが、①自然と触れ合う ②協力 ③自立・主体性だった。それをもとに「自然と触れ合うことを通して、仲間と協力する大切さを学んだり、自分で考え進んで行動したりする力を身に付ける」とねらいを設定した。



自然学校

(2) ねらいとアクティビティを照らし合わせる

①自然と触れ合う

- ・自然発見! クロスワード ・鉛筆づくり、紙すき体験、ひのきホルダーづくり
- ・テント泊、ナイトハイク

②協力

- ・自然発見! クロスワード ・テント泊 ・隠れ家づくり ・野外炊事(カレーづくり)
- ・朝来山雲海登山

③自立・主体性

- ・テント泊 ・鉛筆づくり、紙すき体験、ひのきホルダーづくり ・隠れ家づくり

(3) 自然学校の事前と事後の比較 (児童のアンケート結果より)

Q 1 : 自然にあまり興味がない

【前】 はい 58%、いいえ 42% ⇒ 【後】 はい 11%、いいえ89%
※自然のよさを再発見できた。

Q 2 : 友達と協力できるか不安だ

【前】 はい 44%、いいえ 56% ⇒ 【後】 はい 2%、いいえ98%
※安心感のある集団になった。

Q 3 : 家の人に頼って行動することが多い

【前】 はい 75%、いいえ 25% ⇒ 【後】 はい 9%、いいえ91%
※行動に責任が持てるようになった。

2校の実践発表の中には、この他にも具体的な活動事例や他教科との関連付けなどの話も入っています。今回は、ねらいの設定からねらいを具現化する流れについてまとめました。児童に話し合わせたり、保護者の意見も取り入れたりしながらねらいを考え、具現化させていく流れを参考にいただければと思います。

令和7年度 講座・研修会のご案内

自然学校出前事業

実施時期：令和7年4月～令和8年3月（実施日は各学校等の要請をもとに調整します）
 対象：県内の公立小学校及び義務教育学校前期課程
 内容：◎プログラムデザインにすること
 ◎自然学校に関すること
 自然学校についての説明・事前学習
 ※出前授業として、県立南但馬自然学校で展開されるアクティビティの一部を行うことができます。
 （ロープワーク実習、火おこし体験、1人用テント設営等）

自然学校プレ体験

期 日：第1回 令和7年4月19日（土）
 第2回 令和7年8月23日（土）
 対象：令和7年度利用校の児童とその保護者
 （保護者同伴でご参加ください。）
 募集定員：各回上限25組
 内容：施設見学、火おこし体験、野外炊事、自然物クラフト
 参加費：700円程度（野外炊事材料費及び保険料）

自然学校指導者スキルアップ研修

期 日：令和7年7月28日（月）
 対象：県内の公立小学校及び義務教育学校前期課程教員
 （初任者研修及び中堅教諭等資質向上研修としても受講可）
 募集定員：20人
 内容：アクティビティ指導の基礎基本 選択実習
 ①「五感を使った自然にふれる体験活動 ～自然散策と小枝の鉛筆づくり～」
 ②「仲間と協力する主体的な体験活動 ～隠れ家づくり～」
 ③「活動のつながりを意識した体験活動 ～薪割りからの火おこし体験～」
 プログラムデザインの基礎基本 演習「自然学校プログラムデザイン」

プレ自然学校・アフター自然学校

期 日：日帰り又は1泊2日
 (1) 自然学校受入期間中 金曜日・土曜日受け入れ可
 （金曜日から土曜日にかけての1泊2日可）
 (2) 自然学校受入期間以外 全日（日曜日～土曜日）
 受け入れ可（休校日を除く）
 対象：県内の公立小・中学校及び義務教育学校等の児童・生徒
 ※環境体験事業にも最適です
 内容：自然散策、朝来山登山、自然体感ゲーム、自然物クラフト、
 野外炊事、隠れ家づくり、星空観察、テント泊等
 経 費：食事代（弁当持参可）、施設使用料、活動材料費等が必要です。

親子で自然学校 ～豊かな自然の中で親子のふれあいを深めよう～

期 日：第1回 令和7年7月19日（土）～7月20日（日） 第2回 令和7年12月13日（土）～12月14日（日）
 第3回 令和8年3月7日（土）～3月8日（日）
 対象：自然体験活動に関心のある小学生とその保護者（子どもだけの参加はできません）
 募集定員：各回10組
 内容：自然物クラフト、キャンプファイヤー、テント泊、火おこし体験、野外炊事、薪割り、焚き火、星空観察、
 自然散策、スウェーデントーチ、アウトドアクッキング、竹田城跡登山等
 参加費：宿泊料、食事代、リネン料、保険料、活動材料費等が必要です。

遊友体験活動 ～南但馬自然学校の自然を五感で感じよう～

期 日：第1回 令和7年6月28日（土）「初夏の里山を楽しもう！ ～夏の生き物さがし～」
 第2回 令和7年10月11日（土）「紅葉の里山を楽しもう！ ～いも掘りと秋の生き物さがし～」
 対象：自然体験活動に関心のある方（小学生以下は保護者同伴でご参加ください）
 募集定員：各回30人程度
 参加費：100円（保険料）

大人の自然教室 ～大人には大人の自然の楽しみ方がある～

期 日：第1回 令和7年4月26日（土）「校内に咲くキンランやギンランなどを探し、春の自然を楽しもう」
 第2回 令和7年12月6日（土）「“つる植物”で作るリースやかごを自然物で飾ろう」
 対象：自然体験活動に関心のある方
 募集定員：各回20人程度
 参加費：100円（保険料）

※天候等により中止または内容等が変更になる場合があります。
 ※詳しくは、兵庫県立南但馬自然学校指導課までお問い合わせください

自然学校講座

期 日：令和7年8月25日（月）～8月27日（水）
 ※全日程参加が原則、1日単位の受講は要相談
 対象：大学生、県下の公立学校教員、
 その他 自然学校に関心のある方
 募集定員：35人程度
 内容：兵庫型「体験教育」とは、指導補助員の心得、
 アクティビティ「自然発見！クロスワード」の指導、
 キャンプファイヤー指導の基礎基本、
 アクティビティ「隠れ家づくり」指導の基礎基本、
 自然学校・野外活動におけるリスクマネジメント、
 野外炊事指導の基礎基本等
 参加費：8,500円程度
 （宿泊料、食事代、リネン料、保険料、活動材料費）

冬の自然学校体験講座

期 日：令和7年12月26日（金）
 対象：県内の公立小学校及び義務教育学校前期
 課程教員（初任者研修及び中堅教諭等資質
 向上研修としても受講可）
 募集定員：24人程度
 内容：冬の里山散策、火おこし体験、野外炊事、
 自然物クラフト
 参加費：1,000円程度
 （野外炊事材料費及び保険料）